

壺坂寺にまつわる靈驗譚を題材とする浄瑠璃『壺坂靈驗記』は、明治 20 年（1887）に初演された。本作品は好評を博し、その後も歌舞伎や講談、浪花節といった様々な芸能で演じられることとなった。本論は、宗教的物語が芸能化してさまざまなジャンルに展開する過程をたどり、社会的環境からその特質を明らかにした。

第一部では、宗教的物語から浄瑠璃『壺坂靈驗記』が成立する過程を扱った。第一章では、『壺坂靈驗記』の元となった宗教的物語である沢市開眼譚について論じた。沢市開眼譚とは、盲目の男沢市が観音の靈力により開眼するというストーリーであり、壺坂寺の利益を説く物語として自然発生的に語られるようになった。壺坂寺は西国靈場の一つであるが、西国靈場にはこのような靈驗譚が数多く語り伝えられている。それらの靈驗譚は、西国靈場に対する庶民の関心の高まりを受けて広く流布するに至った。安政 5-6 年（1858-59）には、西国靈場の靈驗譚を主題とする錦絵シリーズ『観音靈驗記』の発行もなされた。

第二章では松本喜三郎の生人形『西国三十三所観音靈驗記』について論じた。生人形『観音靈驗記』は、明治 4 年（1871）から東京で、さらに明治 12 年（1879）には大阪で興行され、共に非常な人気を博した。大阪での興行に際して沢市開眼譚が取り入れられた。その際には元の靈驗譚からプロットが変更されている。元の靈驗譚では沢市の夢枕に立つのみであった観音は、生人形では人間の姿を借りて白昼に姿を現す。この変更は、宗教的な理由によるものではなく、靈驗譚を一つの場面のみでリアルに表わすという生人形の特性によるものだと考えられる。

第三章では浄瑠璃『壺坂靈驗記』について論じた。大阪における生人形の人気を当て込んで、明治 12 年（1879）10 月に大阪大江橋席において浄瑠璃『西国三拾三所観音靈場記』が初演された。これは改訂・増補されて明治 20 年（1887）に大阪彦六座で『観音靈驗記三拾三所花野山』として上演された。そのうちの壺坂寺のくだりが現行の『壺坂靈驗記』である。そのプロットは、元の靈驗譚や生人形から変更されている。浄瑠璃では、沢市の妻お里が靈驗を願い夫沢市がそれを蒙るというストーリーであり、沢市開眼譚に夫婦の物語という新しいテーマが付加されている。浄瑠璃の『壺坂』は宗教的な救済を題材にした物語であると同時に、妻お里の貞節をめぐる物語ともなっているのである。

第二部では、『壺坂』が他ジャンルの芸能に取り入れられた経緯や宗教界に与えた影響を明らかにした。第四章では歌舞伎『壺坂靈驗記』について論じた。歌舞伎の『壺坂』は、人形浄瑠璃を取り入れたもので明治 21 年（1888）に初演されたが、その際にはお里に横恋慕する悪人（「雁九郎」）が書き加えられており、上演に際してはしばしば雁九郎と沢市の早替りがおこなわれていた。当初は雁九郎が登場するバージョンばかりがおこなわれていたが、明治 36 年（1903）に人形浄瑠璃とほぼ同じストーリーのもの（雁九郎は登場せず、したがって早替りもおこなわれない）が上演されると次第にそのバージョンに取って代わ

られるようになった。そこには早替りに対する評価が変化したことが関わっていると思われる。早替りは、明治30年代に入ると劇評家や知識人から次第に批判されるようになる。歌舞伎を「演劇」とみなす人々にとっては、早替りなどのケレンはもはや時代遅れの排除すべき対象でしかなくなったのである。

第五章では講談『壺坂靈驗記』について論じた。講談の『壺坂』の代表的なものとして、二代目旭堂南陵の『壺坂靈驗記一沢市お里の実伝』（1910）と二代目清草舎英昌の『壺坂靈驗お里沢市』（1916）を挙げることができる。どちらも浄瑠璃『壺坂靈驗記』のストーリーを踏まえながらも人物の設定やプロットなどに様々な変更を加えている。

第六章では浪花節の『壺坂靈驗記』について論じた。浪花節の『壺坂靈驗記』は、信頼に足る台本や速記本が公刊されていないため、近代音声メディアすなわちSPレコードとラジオ放送あるいはそれらに伴う印刷物などから詞章を得た。それらの詞章を検討した結果、浪花節『壺坂』は、初代京山小円のものを除き、二代目旭堂南陵の講談を典拠としていることが明らかになった。

第七章では、芸能化された沢市開眼譚が宗教の側に与えた影響について論じた。浄瑠璃をはじめとする芸能で演じられる『壺坂靈驗記』は、元の沢市開眼譚とはプロットが異なる。すなわち新しい沢市開眼譚といえる存在であるが、これらもまたしばしば宗教の世界において取り上げられてきた。壺坂寺の靈驗譚として、元の靈驗譚ではなく、生人形や浄瑠璃の沢市開眼譚を挙げる例がみられるのである。このことは芸能化した沢市開眼譚も、元の靈驗譚と同じく宗教的物語として扱われていることを示す。すなわち芸能化した宗教的物語もまた、宗教の世界に含まれるものとして扱われることがあるのである。

第三部では、浄瑠璃『壺坂靈驗記』が生まれた／読まれた時代に着目することで、どのような特質を持ち、またどのように読まれてきたのかを論じた。第八章では、改良という問題を扱った。浄瑠璃『壺坂』は、初演時の番付によれば「音曲改良」によって作られたとされる。この場合の「改良」とは、当時の言説を検討することにより、病苦の夫沢市のために艱難辛苦する妻お里という貞女を主人公としたこと、さらにお里に横恋慕する悪者が削除されていることにあったと理解できる。その結果、浄瑠璃『壺坂』は、妻お里の貞節が根幹をなすテーマとなった。「改良」は明治期の流行現象であり、その意味で『壺坂』には明治という時代が深く刻み込まれているのである。

第九章では、『壺坂靈驗記』がどのように読まれてきたのかという問題を扱った。こんにちでは、浄瑠璃『壺坂靈驗記』は夫婦愛の物語だとする読み方が過度に強調され、貞節というテーマはほとんど注目されることがない。その要因は、明治30年代前半に貞節という問題が現実的なものではなくなったことと、家族は愛情の場であるという考え方を前提に浄瑠璃が読まれるようになったことが同時並行的に起きていることにあると考えられる。一般に、浄瑠璃をはじめとする伝統芸能は固定化したものの繰り返しではなく、時代に応じて変化していく一面をもつ。『壺坂』における読まれ方の変遷も、そのことを示しているといえるだろう。

これまで述べてきたように、本論文は、『壺坂靈驗記』という浄瑠璃の作品がどのように成立し、他ジャンルにどのように展開していったかを論じたものであり、芸能史研究として位置付けることができるだろう。そして芸能史研究的なアプローチによって、松本喜三郎の生人形『観音靈驗記』が錦絵『観音靈驗記』を典拠していること、生人形『観音靈驗記』に沢市開眼譚が取り入れられたのは大阪での興行の際であったこと、浄瑠璃『壺坂靈驗記』が最初に歌舞伎化されたのは明治 21 年（1888）の京都であったことなどを明らかにすることができた。

その一方本論文は、従来の芸能史研究ではほとんどみられなかった視点からの議論をも含んでいる。その一つは、これまでの芸能史研究でしばしば取り上げられてきた、芸能がどのように宗教的物語を取り入れてきたかという問題に加えて、芸能化された宗教的物語が宗教の側に与えた影響について論じたことである。それによって、芸能化された沢市開眼譚が、さまざまな形で宗教活動に取り入れられていることが明らかになった。

ところで『壺坂靈驗記』の文学的価値は、必ずしも高く評価されているわけではない。したがって本論文は、高い文学的価値を有する作品を対象とする、いわゆる作品研究とは一線を画する。実際、元の靈驗譚のストーリーも、生人形や浄瑠璃、歌舞伎、講談に取り入れられる際に加えられた趣向も、決して独自性が強いものではない。むしろありふれたストーリーおよび趣向だといえるだろう。しかしそうであるからこそ幅広い人々に受け入れられるという面もあるものと思われる。

ただし、おそらく文学的価値がそれほど高く評価されていないことも関係すると思われるが、雁九郎が登場するバージョンの歌舞伎および浪花節の『壺坂靈驗記』については詞章が公刊されておらず、そのことが研究上の障害となっていた。そこで本論文では、明治期に成立した法律や近代音声メディアに関わる資料を用いることとした。これらは従来の芸能史研究ではあまり活用されてこなかったものである。

まず雁九郎が登場するバージョンの歌舞伎については、明治 20 年（1887）に制定された脚本楽譜条例に基づいて著作権ビジネスをおこなう目的で出版された脚本類を参照した。これらは真の作者や出版に至る経緯などが不明であるため、内容については注意を払う必要があるが、当時の上演の実態を知る上で有用である。

また浪花節の『壺坂靈驗記』については、SPレコードの音声および詞章カードなど、さらに新聞ラジオ面に掲載されている詞章を利用した。これらはそれぞれ長短両面をもつが、いくつかのものを総合的にみることによって、当時の上演内容を把握することができるのである。なおSPレコードは近年急速に研究環境が整ってきたのであるが、本論文も大いにその恩恵を蒙っている。

そして本論文においては、ありふれたストーリーあるいは趣向をもつ『壺坂靈驗記』が、近代という時代に生まれ、人々に受容されてきたという事実注目した（そのため『壺坂靈驗記』を元にした創作は考察の対象とはしていない）。特に『壺坂靈驗記』が「音曲改良」によって作られたとされること、およびどのように読まれてきたのかという問題につ

いて考察したのであるが、その際には社会科学的方法を取り入れた。すなわち、新聞や雑誌に掲載された言説を分析することで「改良」の意味を検討し、また社会学などの成果をも踏まえながら、読まれ方がどのように変わっていったかを論じている。

以上のように本論文は、芸能史研究的な研究方法を基礎としながらも、従来の芸能史研究ではほとんどみられなかったテーマや資料、方法論を導入したものである。そしてそのことにより、宗教的物語が芸能化してさまざまなジャンルに展開する過程をたどり、時代背景からその特質を明らかにするという目的は十分に達成できたといえるだろう。